

Asian Journal of
**HUMAN
SERVICES**

Printed 2015.0430 ISSN2186-3350

Published by Asian Society of Human Services

April 2015
VOL. **8**



SHORT PAPER

台湾のソーシャルワークにおける「カルチュラル コンピテンス」の研究動向に関する研究 —量的内容分析を用いて—

陳麗婷¹⁾

1) 上智社会福祉専門学校

<Key-words>

カルチュラルコンピテンス, ソーシャルワーク教育, 内容分析, 多様性, 自己覚知

chen-li@sophia.ac.jp (陳麗婷)

Asian J Human Services, 2015, 8:152-161. © 2015 Asian Society of Human Services

I. はじめに

陳(2014)は、台湾の外国籍のメンバー（特に母親）がいる家族（注 1）（以下、外国籍家族と記す）の早期療育ソーシャルワーク研究を分析して考察を加えた。そこでソーシャルワーカーの役割に関する事項として、下記の 5 点が挙げられた。

- 1 ソーシャルワーカーが外国籍のメンバーのいる家族に関する自分自身の認識について覚知する必要がある。文化的多様性のある家族について、果たして自分はどう捉える傾向があるのか。再確認が求められる。
- 2 児童の障害についてアセスメントする力が求められる。というのは、障害として認識されているものには、環境によるものもあるためである。
- 3 家族の状態やメンバー間の相互関係についてアセスメントする必要がある。東南アジア国籍のメンバーがいる家族の実態として、家族全体が低教育（低学歴）で、社会経済的地位の低いことが指摘されている。また家族内でもその女性配偶者が低い立場におかれ、子育ては彼女たちのみに押し付けられていることも指摘されている。子どもを家族が協力して育てられるようにすることに着目した、家族ソーシャルワークの重要性が求められる。
- 4 制度があれば、支援を必要とする家族に活用されるとは限らない。資源があるにもかかわらず、それにアクセスできていないという現実も指摘されている。資源が当事者に届くよう、アクセスする力をアセスメントする力が求められる。早期療育サービスの利用に影響する要因として、①女性配偶者の教育程度②女性配偶者の中国語の語学力③経済的要因などが挙げられている。それらを踏まえた上で、積極的なアウトリーチが求められる。
- 5 上記の研究で社会の偏見等により、不要に抑圧されている人々の存在が示されていた。東南アジア嫁に対する偏見、報道が存在している。この不当な社会的障壁に挑戦していくことの重要性を認識していくことが求められる。即ちエンパワメントの思想である。

Received

February 12, 2015

Accepted

March 5, 2015

Published

April 30, 2015

上記をふまえ、筆者が強調したいのは、社会構造に着目したソーシャルワークにおけるエンパワメントの必要性である。そこでは、多様な文化を受容する社会の創出に向けて橋渡しとなるソーシャルワーカーの存在が求められている。ソーシャルワーカーたちは、多様な人材が社会に仲間として受け入れられ、その人材が実力を十分に発揮できて、正当な評価を受けることを目指している。ここで有効となる概念がカルチュラルコンピテンスではないだろうか。

カルチュラルコンピテンスは個々の文化が持つ強さ・能力を意味するものではない。むしろ、ソーシャルワーカー自身がそれぞれの文化の独自性を尊重することを意味している。文化について、様々なとらえ方もあるが、ここではユネスコの「文化の多様性に関する世界的宣言」(UNESCO, 2001)の中で言及された定義をあげておく。

「文化とは、特定の社会または社会集団に特有の、精神的、物質的、知的、感情的特徴をあわせたものであり、また、文化とは、芸術・文学だけではなく、生活様式、共生の方法、価値感、伝統及び信仰も含むものである」とした上で、「文化は、アイデンティティ、社会的結束、知識に基づく経済の発展という問題に関する今日の議論において、核心となっている」としている。すなわち文化は、年齢別グループ、地域社会、血縁組織(家族)などの社会を構成する人々によって身に付け・共有し・伝達される行動様式ないし生活様式である。そして、そこには次のものも含まれている。

- ① 思考や学習による信念やふるまいのパターン。
- ② ある社会組織に共有されている価値観。

一般に、社会組織(性・階層・家族・障害者・国籍・性的志向)ごとに固有の文化があるとされている。カルチュラルコンピテンスの発想は、けっして当事者を弱者で依存的なだけの存在として捉えない。多様性を踏まえた上で、ストレングスを見出そうとしている。多様性を理解することは困難であるが、それぞれの文化に価値があることは上記の宣言にもうかがわれる。そのように考えると、カルチュラルコンピテンスを用いて、多様性を視野に入れたソーシャルワークの検討をしていくことは、その本来の意味を発展させるために、極めて示唆に富むものと思われる。

Ⅱ. 問題と目的

台湾においても、カルチュラルコンピテンスが言及されるようになった。カルチュラルコンピテンスに関して、全米ソーシャルワーカー協会の取り組みがきわめて参考となる。全米ソーシャルワーカー協会(以下、NASW)倫理綱領(2008)の前文は、以下のように述べている。「支援が必要で、抑圧され、貧困生活をしている人々に注目すべきである」とした上で「ソーシャルワーカーは文化や民族の多様性を十分に認識し、差別・抑圧・貧困・その他の社会的不正義をなくすために努めなければならない」としている。さらには、NASWは「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラルコンピテンスに関する規準」(2001)を制定している。そこで、カルチュラルコンピテンスに関して、「個人やシステムが敬意を持って効果的に、文化・言語・人種・階層・民族的背景・宗教・その他の多様性の生じさせる要因を持つ人々に対応していくプロセスである。個人・家族・コミュニティの価値を認識し、肯定し、高く評価し、個々の尊厳を認識していく」としている。そして、「倫理と価値」、「自己覚知」、「異文化に関する知識」、「異文化に対応する技術」、「サービス提供」、「エンパ

ワメントとアドボカシー」、「専門職教育」、「言語多様性」、「異文化のクライアントグループに対するリーダーシップ」、「雇用における専門職の多様性」などの項目を挙げている。

前述したように外国籍のメンバーがいる家族を支援するためには、カルチュラルコンピテンスは重要な概念となると思われる(陳, 2014)。他方で、カルチュラルコンピテンスはビジネス、保健・医療、教育、司法・行政などの領域でも用いられるようになっている。そのような状況の中で、カルチュラルコンピテンス自体がそれらの領域の研究の中でどのように用いられているのかを俯瞰した研究はまだ見当たらない。そこで本研究では、台湾の研究において二つの側面からアプローチする必要性を感じた。

- ① ソーシャルワークに限らず、いかなる領域でカルチュラルコンピテンスがどのように用いられるかを探ること
- ② ソーシャルワークの領域において、どのような関連語がどのように言及されているのかを探ること

そこで本稿では、上記の課題に取り組むために、台湾の学術論文がどのようにカルチュラルコンピテンスとその関連語(ソーシャルワーク領域)について言及しているのかについて、内容分析を用いて基礎資料を作成することを目的とする。

なお、本報告ではカルチュラルコンピテンスを、主として上記の NASW 定義を参考にしていく。

Ⅲ. 方法

以下の2つの段階でレビューを行った。

3.1 研究1

台湾の学術論文を対象にして、台湾の学術論文検索システムで、カルチュラルコンピテンスに言及している件数を探る。言及している領域を抽出し、その上で領域ごとに年代における変化を探る。

3.2 研究2

上記を踏まえて、ソーシャルワーク研究に関する学術論文で下記の関連語について言及している件数を探る。関連語は、ソーシャルワークの論文のキーワードを分類し、カテゴリとして抽出されたものにより下記の通り設定した。

“professional”、“family”、“empowerment”、“evaluation”、“reflection”、“system”、“indigenous”、“discrimination”であった。これらの言及状況を年代別に整理するとともに、これら関連語間の言及の相関状況を検定する。なお、“indigenous”に関連して、新住民(注2)も含めた言及状況について、教育と保健・医療の領域と比較する。

Ⅳ. 結果

4.1 研究1の結果

各領域で抽出された論文数を、10年きざみの年代で整理すると表1の通りであった。筆者がカルチュラルコンピテンスに関する研究を抽出した結果、領域として、「ビジネス」、「教育」、「ソーシャルワーク」、「保健・医療」、「社会文化」、「司法・行政」、「心理」を設定した。

表1 年代と領域のクロス表

			領域							合計
			ソーシャル ワーク	教育	ビジネス	社会文化	司法・行政	保健・医療	心理	
年代	1984- 1993	度数	0	2	0	3	0	0	0	5
		年代	0.0%	40.0%	0.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	領域	0.0%	1.8%	0.0%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	
	1994- 2003	度数	3	20	7	27	0	3	1	61
		年代	4.9%	32.8%	11.5%	44.3%	0.0%	4.9%	1.6%	100.0%
	領域	5.9%	18.0%	20.6%	56.3%	0.0%	11.1%	12.5%	21.6%	
	2004- 2013	度数	48	89	27	18	4	24	7	217
		年代	22.1%	41.0%	12.4%	8.3%	1.8%	11.1%	3.2%	100.0%
	領域	94.1%	80.2%	79.4%	37.5%	100.0%	88.9%	87.5%	76.7%	
合計	度数	51	111	34	48	4	27	8	283	
	総和の%	18.0%	39.2%	12.0%	17.0%	1.4%	9.5%	2.8%	100.0%	

2つの大きな傾向が認められる。第一は、社会文化領域に関してであり、第二は教育、ビジネス、ソーシャルワーク、保健・医療の領域に関してである。

社会文化領域は1984-1993年に全体に先駆け同年代では60.3%を占めた。そして、1994-2003年にピークを迎え44.3%を占めたが、その後は減少している。それに対して教育、ビジネス、ソーシャルワーク、保健・医療の領域では2004-2013年に急速な増加をしている。同年代に教育は41.0%を占めた。

4.2 研究2の結果

次に、ソーシャルワーク領域で関連語の抽出件数は下記の通りであった。関連語はソーシャルワークの論文のキーワードを分類して、下記の通り抽出したものより、10年きざみの年代で整理した。

表2 関連語の言及件数 (%は年代ごとの総数比)

	profe- ssional	family	empower- ment	indi- genous	discrimi- nation	evaluation	reflection	system
1984-1993	3	2	1	2	2	0	0	2
/3件中	100.0%	66.7%	33.3%	66.7%	66.7%	0.0%	0.0%	66.7%
2004-2013	39	15	7	18	3	13	5	20
/48件中	81.3%	31.3%	17.0%	37.5%	6.5%	27.1%	10.4%	41.7%
合計	42	17	8	20	5	13	5	22
/51件中	82.4%	33.3%	15.7%	39.2%	10.2%	25.5%	9.8%	43.1%

すべての関連語で、1984-1993年に比較して、2004-2013年に実数が大幅に増加している。特に“professional”、“system”、“indigenous”の3語は、2004-2013年にそれぞれソーシャルワーク論文数の82.4%・43.1%・39.2%を占めている。

次に、関連用語間の相関を分析した。相関分析結果は下記の表3の通りであった。

表3 相関分析(**. 相関係数は1%水準で有意(両側)。*. 相関係数は5%水準で有意(両側))

	indigenous	professional	family	empowerment	evaluation	reflection	system	discrimination
indigenous	1	.285*	-.130	-.008	-.091	-.038	.203	.272
professional	.285*	1	-.076	-.198	.282*	-.129	-.076	.156
family	-.130	-.076	1	.271	-.118	.005	.067	-.099
empowerment	-.008	-.198	.271	1	-.246	.013	.390**	-.145
evaluation	-.091	.282*	-.118	-.246	1	-.070	-.225	-.031
reflection	-.038	-.129	.005	.013	-.070	1	.056	-.111
system	.203	-.076	.067	.390**	-.225	.056	1	-.014
discrimination	.272	.156	-.099	-.145	-.031	-.111	-.014	1

さらに、教育と保健・医療の先住民と新住民に対する言及状況をソーシャルワークと比較してカイ二乗検定を行った。結果、 $p=0.001<0.05$ であった。

表4 領域と先住民・新住民に関するクロス表

			先住民と新住民				合計
			両方無し	先住民のみ	新住民のみ	両方有	
領域	ソーシャルワーク	度数(領域の%)	22(43.1)	20(39.2)	9(17.6)	0(0)	51(100)
	教育	度数(領域の%)	89(80.2)	13(11.7)	8(7.2)	1(0.9)	111(100)
	保健・医療	度数(領域の%)	20(69.3)	0(0)	7(25.9)	0(0)	27(100)
合計		度数(%)	131(69.3)	33(17.6)	24(12.7)	1(0.5)	189(100)

ソーシャルワーク領域が教育と保健医療領域に比して、「先住民のみ」を高く取り上げていた。他方で保健医療がソーシャルワークと教育領域に比して、「新住民のみ」を高く取り上げていた。

V. 考察

以下に上記の結果を要約し、その上で結果に対する考察を行う。

5.1 結果の要約

以上の結果から、次の点がソーシャルワークの研究動向に関して示唆された。

- ① 研究1よりカルチュラルコンピテンスに言及する領域として、「ビジネス」、「教育」、「ソーシャルワーク」、「医療」、「社会文化」、「司法・行政」、「心理」が見出された。年代と

領域における変化を探った結果、過去 10 年で、教育・福祉・ビジネスの領域での伸びが著しい。特に社会文化が 1994-2003 年に最も多く取り上げていたカルチュラルコンピテンスの視点が、2004-2013 年にはビジネス・教育と同様にソーシャルワークの領域でも確実に浸透しつつある。そして“professional”の在り方に、新たな視点を導入したことが伺われる。

- ② 教育と保健・医療と比較したところ、ソーシャルワークの領域で“indigenous”をカルチュラルコンピテンスの視点から取り上げることとなった。グローバリゼーションにより新住民に目が向けられるのと同時に、国内の先住民にも注目されるようになったことが示唆された。
- ③ 研究 2 では、ソーシャルワークにおいて、関連語の言及状態を探った。関連語に言及している件数は、すべての語(特に“professional”と“indigenous”)において過去 10 年間で増加していた。そして“professional”が“evaluation”と“indigenous”に、“empowerment”が“system”と相関関係の有意性が認められた。これらの関連をさせた研究動向であることが伺われる。

なお、“indigenous”は教育と保健・医療に比して、ソーシャルワークにおいて高く取り上げられていた。

5.2 結果に対する考察

以上の結果を踏まえたうえで 3 点について考察したい。第一になぜソーシャルワークにおいてカルチュラルコンピテンスの言及数が増えたか。第二は言及数が増えることが意味することは何かである。第三に、ソーシャルワークの具体的側面における検討に関してである。以下それぞれについて述べる。

5.2.1 なぜソーシャルワークにおいてカルチュラルコンピテンスの言及数が増えたか

台湾の国内における要因と、国外からの要因が考えられる。即ち、国内における要因として政策的に先住民族を尊重するようになったということが挙げられる(莊, 2005)。ソーシャルワークにおけるコンピテンスの言及で先住民族との関連が示唆されたことはその証左と言えよう。さらにその経過を見るうえで、1999 年の 921 大震災も触れておきたい。1999 年の 921 大震災で、都市部のソーシャルワーカーたちが被災地支援のために支援に行ったことも一つの促進要素としてあげられるであろう(黄, 2009; 陳, 2011)。それにより、多くのワーカーたちが従来のソーシャルワーク技法では十分に対応できないことに接し(莊, 2005)、台湾の先住民の文化・特徴に適した知識・スキルなどの必要性を強く認識させられたものと考えられる。他方で、国外からの要因は外国からの移民の増加が挙げられる(陳, 2008; 吳, 2009; 張・曾, 2011)。これはまさに冒頭で述べた外国籍家族の例などが該当する。台湾の主流の文化を前提として、それに適応を求めるといえるような支援に限界が生じたといえよう(孫・郭, 2009; 吳, 2009; 張・曾, 2011)。

5.2.2 言及数が増えることが意味することは何か

第二の言及数が増えることが意味すること、について述べていきたい。基本的には、ソーシャルワーク専門職の理念・教育・実践の在り方を変革させる可能性があるということであ

ろう。“professional”、“family”、“empowerment”、“indigenous”、“discrimination”、“evaluation”、“reflection”、“system”の語に対する言及数が確実に増加していることは、専門職が自分たちの実践を省察する必要性を唱えており、また他方で実践においても次の点が考えられる。個々の支援を要する人々に寄り添うサポートができるようにするためには、多くの台湾人(先住民に対しても)の発想で接するのではなく、一人ひとりの考えを理解し、信頼関係を築くためには個々の語りを傾聴することが必要となる。そして個々の心情や置かれた状況への理解をするために、その文化への理解とリスペクトが必要となる。そこには他文化に対するワーカー自身の自己覚知も求められる。そして、ここでは単に個別の支援に留まらず、社会的障壁への挑戦の支援という視点が求められる。そのような視点を従来のソーシャルワークに反省を促すものとなるのではないだろうか。

5.2.3 ソーシャルワークの具体的側面における検討

上記をさらに、具体的な次元から論じるために、3つの点について触れたい。第一に実践のレベルにおける疑義、第二にソーシャルワークの教育に関して、第三にエンパワメントに関して、である。

ア) 実践のレベルにおける疑義

従来のソーシャルワーク実践が、支援を必要とする人々への対応が効果的ではないと認識されたということである。文化の違いに対して十分な認識ができていないために、効果的なソーシャルワーク実践ができていないというものである(呉, 2009; 林, 2011)。具体的には、先住民に対しソーシャルワークの実践をもう一度振り返り、先住民に寄り添った支援の在り方を模索する必要があると示すものもある(黄, 2009; 郭・黄, 2010; 陳, 2011; 黄, 2013)。“professional”と“indigenous”に相関が認められたことはその証左ともいえよう。

台湾の研究の中で、興味深い2つの事例が示されている。多くの先住民地域のソーシャルワーカーは、漢民族専門ワーカー、先住民専門ワーカー、先住民ワーカーである。専門教育を受けたワーカーであるかどうか、先住民の出身であるかどうか、による実践の相違、メリット・デメリットに関する調査研究があった(莊, 2005; 廖, 2005; 莊, 2009)。他方で人身売買の被害者を支援するソーシャルワーカーの実践報告もなされている(江, 2010)。従来のソーシャルワーク領域(児童・高齢・家族)を超えた領域として、外国人(特に東南アジアの出身)への支援も展開されていることが示唆されている。

上記の研究がなされてきたことと、期を同じくして国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW, 2014)では、ソーシャルワークの定義が改正された。この定義では、国や地域ごとに上乗せして、独自の定義を作ることができることとなった。さらにその解釈には、「植民地主義の結果、西洋の理論や知識のみが評価され、諸民族固有の知は西洋の理論や知識によって過小評価され軽視され、支配された」として、「どの地域・国・国の先住民たちもその独自の価値観および知を作り出しそれらを伝達する様式によって、科学に対して計り知れない貢献をしてきたことを認めるとともに、そうすることによって西洋の支配の過程を止め反転させようとする。こうしてソーシャルワークは、世界中の先住民たちの声に耳を傾け学ぶことによって西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権を是正しようとしている」と述べている。まさに「西洋の諸理論だけではなく、先住民を含めた諸民族の固有の知」に拠っていること認識しているということであろう。これは台湾がカルチュラルコンピテンスについて直面した状況、すなわち単一の基準が必ずしもすべてに当てはまらない、それぞれの文化を十分に含んだうえで

検討していくことの必要性を示すものではないであろうか。

イ) ソーシャルワークの教育に関して

先住民の支援の教育に関して、従来の教育方法では現場で役に立つソーシャルワーカーを育成できないことの反省に立ち、台湾の全国レベルとしては教育プログラムの中に多文化ソーシャルワークを導入すべきである(游, 2012)という議論がされている。また個別レベルでは、先住民をソーシャルワーカーとして育成しようという動きを、多文化ソーシャルワークを学生に理解させるために東南アジアに実習に行かせるという試みもある(馬, 2004; 游, 2012)。以上のことは、台湾の従来行われてきたプログラムがすべてに活用できるものではないという認識に立ったものであろう。

ウ) エンパワメントに関して

カルチュラルコンピテンスは文化の違いという嗜好性の次元に留まるものではない。政治的権力構造によりこれまで主流文化に抑圧・差別されてきたことの不当性に対して抗議するものである(陳, 2008; 莊, 2009・2012)。前述したソーシャルワークの関連語の中でエンパワメントへの言及が増加していることは、その一つの理由となるのであろう。さらに前述したとおり、関連語間でエンパワメントとシステムの相関が認められたことは、個人への支援にとどまらない社会システムの再構築や変革の必要性を示唆するものであろう。国際ソーシャルワーカー連盟が改正した、ソーシャルワークの定義では社会改革と社会開発が述べられており、その中心原則として位置づけられたことと密接に関係していると思われる。

VI. おわりに

筆者は台湾のソーシャルワーク研究においてカルチュラルコンピテンスが言及されるようになってきた事実を述べてきた。そしてこれが従来の専門性や教育を見直して変革させる契機となることを示してきた。

本稿の限界はあくまで、研究で取り上げられた動向から探るという次元であり、現実のソーシャルワーク現場の調査でないことが挙げられる。

特に大きな課題として、カルチュラルコンピテンスが具体的な支援にどう結び付くのかまだカルチュラルコンピテンスという集団を重視する発想の中でどこまでそこに所属する個人を尊重できるのか十分に議論できなかった。これは今後の課題とし、以後現場実践を踏まえた上での研究を展開していきたい。

注

- 1) 本稿で「外国籍」とは、東南アジア籍の者を想定している。
- 2) 新住民とは海外からの移住者を意味するが、本稿で主として東南アジア籍の者を想定している。

文獻

- 1) 陳麗婷(2014) 台湾の外国籍家族の早期療育ソーシャルワーク支援に関する検討—社会的障壁との相互作用に着目して—。 *Asian journal of human services*, 6, 149-160.
- 2) United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization(2001) Universal Declaration on Cultural Diversity. 文部科学省仮訳.文化の多様性に関する世界的宣言.
- 3) National Association of Social Workers(2008) Code of Ethics of the National Association of Social Workers.
- 4) National Association of Social Workers(2001) NASW Standards for Cultural Competence in Social Work Practice.
- 5) 莊靜雯(2005) 原住民籍社會工作者對原住民社會工作的想法—一位漢籍研究生的初探—。東吳大學社會工作學系修士論文。
- 6) 黃盈豪(2009) 社區產業與泰雅部落—大安溪部落共同廚房對社區工作教育的反思—。明道通識論叢, 6, 231-252.
- 7) 陳翠臻(2011) 從部落經驗建構原鄉社工人員應有的文化能力與認知。社區發展季刊, 134, 483-497.
- 8) 陳定銘(2008) 台灣非營利組織在新移民婦女照顧政策之研究。非政府組織學刊, 4, 35-50.
- 9) 吳敏欣(2009) 從某新移民協會的自助歷程談起。社區發展季刊, 125, 356-367.
- 10) 張智雅·曾薔霓(2011) 台灣新移民女性配偶社會參與之研究。嘉南學報, 37, 416-430.
- 11) 孫智辰·郭俊巖(2009) 社工員面對外籍配偶個案文化能力之探討—以家庭暴力事件為例—。通識教育學報創刊號, 251-282.
- 12) 吳明儒(2009) 社區多元文化與社會包容之探討—以台灣新移民女性為例—。社區發展季刊, 127, 99-112.
- 13) 林悅玲(2011) 非政府組織工作者跨境服務之文化挑戰與因應策略—以 W 機構為例—。國立暨南國際大學社會政策與社會工作學系修士論文。
- 14) 郭俊巖·黃玉明(2010) 原住民在都市謀生的艱辛歷程之研究—以三個受助個案為例—。弘光學報, 59, 60-77.
- 15) 黃瓊芬(2013) 跨族群居家服務互動狀況之研究—以原住民照顧服務員觀點—。國立東華大學民族發展與社會工作學系修士論文。
- 16) 廖秀玲(2005) 原住民部落社區工作者工作經驗之研究—以中華至善社會服務協會大安溪部落工作站為例—。慈濟大學社會工作研究所修士論文。
- 17) 莊曉霞(2009) 原住民社會工作之反思。臺灣社會工作學刊, 6, 147-168.
- 18) 江妮諺(2010) 人口販運服務工作者文化能力探索—多元文化觀點—。實踐大學社會工作學系修士論文。
- 19) International Federation of Social Workers(2014) Global definition of Social work. 日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門職団体協議会(訳)(2014). ソーシャルワークのグローバル定義。
- 20) 游美貴(2012) 反思與實踐—連結多元文化的社會工作教育—。臺灣社會工作學刊, 10, 97-118.
- 21) 馬宗潔(2004) 當原住民遇到非原住民。東吳大學社會工作學報, 10, 35-72.

SHORT PAPER

A Study of “Cultural Competence” in Taiwanese Social Work Research : Using Quantitative Content Analysis

Liting CHEN ¹⁾

1) Sophia School of Social Welfare

ABSTRACT

Since the 1990s, the number of immigrants to Taiwan has increased, and indigenous people have gained political esteem. This social situation, therefore, calls for an awareness of “cultural competence.” Cultural competence means that social workers respect the originality of every culture in a society. The term cultural competence has been used often in social work research in Taiwan. In order to clarify how cultural competence and related phrases have been used, I performed a quantitative content analysis of Taiwanese research. I ran a computer search to reveal the mentions of cultural competence in the research of several fields, including business, education, and social work and calculated the frequencies of how often it was mentioned (study 1). Taking the above results into account, I also ran a computer search to assess how often related phrases were mentioned in social work research (study 2). The results of Study 1 show that cultural competence has been mentioned in the fields of business, education, social work, medicine, social cultures, administration & legal, and psychology. Furthermore, the frequency with which this phrase has been mentioned in business, education, and social work has increased steeply in the last ten years. The results of Study 2 show that the use of related phrases (e.g., “professional,” “family,” “empowerment,” “indigenous,” “citizenship,” “teaching,” “evaluation,” “reflection,” and “system”) has steadily increased in the last ten years. I detect a correlation coefficient between the mentions of these phrases. In addition, there is a correlation significance between “empowerment” and “system” and between “professional,” “evaluation,” and “indigenous.” The above results suggest that the use of cultural competence has certainly spread in the social work fields in the last ten years. The concept of cultural competence may present an opportunity to greatly change social work education and practice.

< Key-words >

cultural competence, social work education, content analysis, diversity, self-awareness

chen-li@sophia.ac.jp (Liting CHEN)

Asian J Human Services, 2015, 8:152-161. © 2015 Asian Society of Human Services

Received

February 12, 2015

Accepted

March 5, 2015

Published

April 30, 2015

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Who Intends to Leave Residential Institutions for Persons with Disabilities in Korea?.....	Sunwoo LEE	1
Measuring Inhibitory Control without Requiring Reading Skill.....	Hideyuki OKUZUMI, et al.	13
The Current Condition and Underlying Problems of Social Service in Korea.....	Taekyun YOO, et al.	20
Impact of Movement Cost on Income and Expenditure Ratio in Home-Visit Long-Term Care Service Businesses in Japan.....	Hitoshi SASAKI, et al.	34
Study of Treatments and their Effects on Behaviour Improvement of Children with Problem Behaviour such as ADHD.....	Eonji KIM, et al.	51
The Development of Inclusive Education Assessment Indicator(IEAD) and the Analysis of Laws and Institutional Policies in Japan.....	Changwan HAN, et al.	66
The Effects of a Self-management Support Program for Lifestyle-related Diseases on Communication Skills of Nursing Students.....	Kyoko TAGAMI, et al.	81
The Development Draft of the Outcome Evaluation Tool for Companies Employing Persons with Disabilities in Japan and Korea : The Development Draft Evaluation Tool to the Social Contribution Outcome and Evaluation Index to the Management Outcome.....	Moonjung KIM, et al.	90
A Study on the Development of Employment System Assessment Indicator & Tool for Persons with Disabilities from the Perspective of QOL.....	Haejin KWON	107

REVIEW ARTICLES

The Definitions of Multimorbidity and Multiple Disabilities(MMD) and the Rehabilitation for MMD.....	Masahiro KOHZUKI	120
The Effects of Exercise, Cognitive Intervention and Combined Exercise and Cognitive Intervention in Alder Adults with Cognitive Impairment and Alzheimer's Disease : a literature review.....	Minji KIM, et al.	131

SHORT PAPERS

A Study of "Cultural Competence" in Taiwanese Social Work Research : Using Quantitative Content Analysis.....	Liting CHEN	152
The Current Situation and Limitation of Learning Support for Students with Disabilities in Japan : Support for Students with Visual, Auditory, and Physical Disabilities.....	Kohei MORI, et al.	162
Examination of the Issues with and the Support System of Volunteer Activity for Elderly People with Dementia.....	Misako NOTO, et al.	177
A Study on the Use of ICT Education Indicators (Draft) Development in Special Needs Education : Focus on Japan and South Korea.....	Sunhee LEE	189